

ばか婿のはなし ㊦

秋がきてばか婿の家でも粟がたととれたんだとお。それで夫婦はよろこんで実のはいった粟をとつつあは刈つて軒場に干し、そのあとふりうち棒でたたいて、箕で吹きだしたんだとお。ばか婿は「とれたぞい、とれたぞい。」と大声で家のなかで糸とりをしているおつかあのところへとんでいったんだとお。それからつづけさまにこういつてきいたんだとお。「おつかあ、なんぼとれたべなあ、うすに八升、箕に八升、ななます、八ます、ここのです、十ます。なんぼになるべいなあ。」おつかあは、糸とりをやめて胸算用をしたと思つと、「おとつあ、五斗だべい。」ばか婿は妻の勘のよさにあきれてしまったんだとお。

ばか婿のはなし ㊧

みなみやまのばか婿は、しゅうとの家によばれてゆくことになったんだとお。そこでしゅうとのところでは手落ちなくふるまうようにと、妻はあれこれ行く前にいい聞かせたんだとお。その一つに、まんまを食ったあと湯をのむときは、あつかつたらたくあんを二きれ お椀に入れてかきまわし、さめてから飲めといったんだとお。そこでばか婿は支度してしゅうとの家へ行つて、まず風呂に入ることになったんだとお。入つたらあつかつたので、大声で「長いたくあんもつてこい、長いたくあんもつてこい」と呼んだとお。もつてきたたくあんのしつぽの方で湯をかきまわして「ああいい湯になった。ああいい湯になった」とたくあんをかじりながら首をちぢめてひたつていたとお。

ばか婿のはなし ㊨

むかし、みなみやまにばか婿がいたんだとお。あるときしゅうとによばれて行くことになったんだとお。